

「ひとりの若者の自死 荒廃した不寛容な社会」 2016年03月26日

『週刊金曜日』の「論争」欄に、上記のタイトルで、私の投書が掲載された。3月16日のホームページで「万引きをしたら、推薦できないのか」と題して書いたが、添削し、簡潔にまとめられているので、再度転載したい。

広島県府中町の町立府中緑ヶ丘中学校の3年生の男子生徒が、1年生のときに万引きしたことがあるから、志望校の推薦状を出せないといわれ、自死したというニュースが報道されている。『朝日新聞』（3月10日電子版）によると、担任教諭は生徒に対し、「万引きがありますね」と切り出した。「えっ」と生徒。「3年の時ではなく、1年の時だよ」（担任）、「あっ、はい」（生徒）……。担任から万引きを親に報告する（「（保護者と）一緒に考えよう」）といわれ、その数時間後に、生徒は自死していたという。自死後に調査したところ、じつは冤罪だった。生徒は万引きをしておらず、誤った記載に基づいて推薦できないと告げられていた。生徒は「どうせ言っても先生は聞いてくれない」と言っていたとも報道されている。こんな残酷なことがあるのか。生徒の苦しみ、遺族や友人たちの悲しみを思うと、怒りが沸騰する。

学校側は記載を訂正しなかったことを謝罪している。町の教育長も「生徒の不明確な発言で、（万引きの事実が）とれたと思ってしまった」と述べ、「学校側に責任があった」と陳謝した。学校側は、一人の生徒を死に追いやったのだから、取り返しのつかないことをしてしまった。学校への非難は言を待たない。

だが、そもそも「万引きをしたら、推薦できないのか」と問いたい。人は誰でも過ちをおかすものだ。そこに気づくよう促すことが教育ではないか。かりに万引きをしたとしても、「今は更生して真面目にやっています。自信を持って推薦します」と、書く可能性はなかったのか。2年も前のことを持ち出し、推薦できないというのは、教育の放棄であろう。学校は、それほど生徒に対し不寛容なのか。啞然とする。

つねに親や教諭の言うことをよく聞く品行方正、「善い子」の方が、むしろ危ういのではないか。そのような子は時流に流され、批判的な視点を持たない“大人”になる可能性もある。社会的に富や名声を得た人々の犯罪事例をイヤというほど聞かされている。そうしたなかには子どもの頃、「善い子」を通してきた人も多かったのではないか。

人はみな過ちや間違いをおかしながら、人間と社会のあり方を学んでいく。いたたまれない生徒の自死に対し、学校側が記載を訂正しなかったことを詫げるのは当然だが、何よりも教育を放棄した事実を重く受け止めてほしい。推薦状には、「過去には間違いがあったけれども、学校としては、責任を持って推薦します」と書いてほしかった。学校は生徒の過ちに目くじらを立て、将来を閉ざすのではなく、ともに考え、あらゆる可能性を引き出し、広げる場であってほしい。

小さな過ちに不寛容でいながら、大きな“罪”を咎めない現代の風潮に、私は社会の荒廃を見る。

私は子どもの頃、成績はともかく、決して「善い子」ではなかった。言いたくない「悪い事」をした。しかし、その経験で人を傷つけることの重大さを知らされた。子どもはいかようにも回復、矯正できる。将来の道を閉ざした学校の対応を理解できない。まして冤罪で、自死まで追い込んだというから、やり切れない憤りを持つ。ただ、大人たちの醜い悪に関しては、きっちり責任を取らせなければならない。